

英語科・外国語活動を中心とした提言（若手 保彦 先生）

はじめに

令和3年度は、教科指導員として小学校2校、中学校2校の計4校を訪問、視察する機会をいただいた。私の話は「提言」と言えるほどのものではないが、せっかく機会をいただいたので、訪問を通じて感じたこと、また今後の取組の方向性について個人的に感じていることを英語教育の立場から述べてみたい。

学校訪問全体に関する感想

毎年のことになったが、最も印象に残っているのは、訪問したどの学校でも、廊下ですれ違う児童・生徒が元気なあいさつを自然にできることである。根底には先生方による日々の地道で粘り強い指導があることと思う。

また、こちらも毎年のことだが、最初の時間に行われる学校経営説明では、各学校において特色ある目標が定められ、目標の実現に向け組織として行動する姿勢を感じた。一般授業参観も、多くの先生方が、児童・生徒の関心を惹くよう工夫を凝らした授業を展開しており、教室に貼られた掲示資料などからも、学習への意識を高めようとする先生方の努力がうかがえた。

特定授業（英語および外国語活動）に関する感想

特定授業では、どの授業においても、児童・生徒と教師、児童・生徒同士のコミュニケーションが日頃から図られ、間違いを恐れずに積極的なチャレンジを行える雰囲気ができていると感じた。このことは **trial & error** を通じて学ぶことの多い外国語学習においては特に大切である。

今年訪問させていただいた小学校での2つの特定授業では、どちらも児童からの反応を引き出すようなインタラクションが行われていることが印象に残った。先生方が自然なやりとりの機会を作ることで、英語を話すことに対する自信を持たせたり、抵抗感を払拭したりするための取組は、特にこの段階では重要である。また、授業前に児童が英語に慣れ親しむことができるような活動を行うこと、教科書に提示されていない言語材料でも子どもにとってなじみのあるものを取り入れること、教科書に示された会話を少し発展させるような取組など、外国語活動や外国語の授業にも、担当教員やALTによる様々な工夫が随所に見られるようになってきた。

中学校での2つの特定授業では、いずれも、自分が将来やってみみたいことや、日本文化という題材に関して、マインドマップを活用して思いついたものをできるだけ多く書き出させるなど、思考力の育成を意識した活動を取り入れていることが印象に残った。また、ICT機器を効果的に活用する取組や、1回目のグループ内での発表でメンバーからももらったアドバイスを2回目の発表に反映させる指導手順の工夫も印象に残った。ここで紹介した取組は「思考力・判断力・表現力等の育成」や「ICT機器の活用」「リフレクション」など、いずれも新学習指導要領のキーワードと関連するものであり、先生方が新学習指導要領を意識した実践を行っていることがうかがえた。

一方、課題についてであるが、小学校においては、ことばへの興味・関心を高めるような活動がもっとあってもよかったと思う。例えば、果物を扱う学習で **grape** と **grapefruit** という単語が出てくるが、活動の区切りや授業の最後に「**grapefruit** には **grape** というつづりが入っているね。**grape** とどんな関係があるのだろうか？」のように問いかけることは、言葉の成り立ちを考えさせる上で重要である。同様のことは **apple** と **pineapple**、**melon** と **watermelon** にも言える。発音やつづりが似ている場合に、その関連を考えることは、語彙習得を効率的に行うことにもつながってくる。

ことばへの興味・関心を持たせるためのもう一つのきっかけとして、日本語を英語でどう表現するかを

考えさせることも重要である。例えば「杏仁豆腐」は、聞き手が日本に長く滞在している外国人であればそのままでも通じるかもしれないが、そうでない場合、“Chinese-style almond jelly”のように、英語にすることも必要になる。こういった英語表現を紹介することで、「杏仁豆腐」はもともと中華料理であることや、日本語では「豆腐」であるが英語ではjellyと表現されることに気づいたりできる。また、「『アンズ』は“apricot”のはずなのになぜ“almond”という表現になるのか」のような疑問を持つきっかけにもなる。ことばに対する知的好奇心を持たせることは、中学校や高校だけでなく、生涯にわたってことばを勉強する姿勢を育てることにもつながる。短時間でいいので、ぜひ授業のどこかでふれるようにしたい。

中学校においては、今年度から、新学習指導要領に基づいて作られた教科書が使われるようになった。これに関連して、多くの英語教師から、教科書に登場する語彙が大幅に増えたことにどう対処したらよいかという悩みの声を聞くようになった。また、語彙が増えたことで、題材もこれまでより深い内容が扱われるようになった。そのことに対しても「内容を理解させるだけで精一杯で、活用させるところに時間を使えない」といった声を耳にしている。これは他教科の先生へのお願いになるが、外国語の教科書に登場する題材の基礎知識的なものについては、他教科で扱ってもらうことはできないものだろうか。もちろんこれは外国語担当教員からの働きかけがあって始まる取組であるので、外国語担当教員は、他教科の先生に、英語教科書の題材内容を伝える取組を行ってほしい。

他校のALT（外国語指導助手）との連携や活用について

最後に、他校のALTとの連携や活用について言及しておきたい。新型コロナウイルスの感染拡大で、ALTがなかなか日本に来られなくなり、ALTが予定通り配置されない学校が増えたと聞いている。ALTは生徒が英語でコミュニケーションを図る上で最も身近な相手の一人であり、「英語でコミュニケーションを行うことができた」という達成感を生徒に持たせる上で重要な存在である。他校のALTと連携し、オンライン上で交流するなどの取組により、児童・生徒が英語でコミュニケーションを図ることができるような体制づくりが望まれる。